
小さなわがまま

小林 太陽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小さなわがまま

【Nコード】

N6706E

【作者名】

小林 太陽

【あらすじ】

私は普通のサラリーマン、妻子持ち。親子の些細な交流を通して自分の至らなさに目覚めていく。常識とは何か？大人とは何か？を考えさせられるショートストーリー。

「ワンちゃんが公園に捨てられてたの」

蘭子はそう言って、まだ生れてから1ヶ月は経っていないであろう白い子犬をセーターのポケットに入れて連れて帰ってきた。

私はその弱弱しくぬくぬくとした可愛い子犬に目をやると、頭をそっと撫でてあげたいという気持ちになった。

しかしもう仕事に行かなければならない時間だ。

蘭子の“わがまま”を聞いている暇はない。

「パパ、蘭子が連れてきたその子を飼う事はできないよ。牛乳が冷蔵庫に残ってるからそれをその子にやってまた公園に返してきなさい」

蘭子は一瞬三白眼になって僕に怒った様に見えたが、すぐに悲しい表情を浮かべた。

その小さな手でその小さな子犬の背中をさすりながら、家の前の道路にしゃがみ込んだ。

朝日が住宅の隙間を縫いながらじわじわと高度を上げていた。

「蘭子、パパもう行くから、ちゃんと公園にワンちゃん返して来るんだよ」

子犬は蘭子の方を向いたまま、クウーンクウーンと鳴いている。

まだしっかりと立ち上がることも出来ずによろよると蘭子の足元を歩こうとしている。

蘭子は黙ったまま目の前の白いこの子の頭や身体を撫で続けていた。私は出勤しなければならなかったので、電車に乗るため小走りに家を出た。

19時、私は帰宅した。

妻が洗濯物を乾燥機にかけ、食卓へ戻ってくる。

しかしいつもなら一緒に夕飯を食べるはずの蘭子が今日は何故か食

卓に下りてこない。

「蘭子はどうしたんだ？もう夕飯食べたのか？」

妻は私に目をやるといいえとだけ答えた。

箸で茄子の煮びたしに手を伸ばし、ご飯と一緒に口に運ぶ。

茄子に滲み込んだ出し汁の旨みが私の口を喜ばせた。

しかし喜ぶには何かが足りない気がした。

妻は相変わらず何も話さなかった。

「今日な、会社でこんなことがあってな……」

私だけがこの食卓の中心で話していた。

私だけがこの世界の中心で生きていた。

それでも妻は薄らと笑顔で話を聞いてくれていた。

無機質な食卓に飾られた儂げな一厘の花の様だった。

結局、蘭子は自分の部屋にあの子犬を連れてきてベッドの下に菓子箱を用意し隠していた。

私はそれを知って蘭子に説教をする。

蘭子は俯いたままカーペットに小さな涙をポタポタと落とし続けていた。

私は蘭子に「人の話を聞くときは目を見なさい」と注意した。

しかし蘭子は俯いたままだった。

私はその後、妻に何かつまらないことを喋ると、お風呂に入ろうとしていた。

風呂場の窓についた結露が時の流れと共に下に線を描きながら落ちてゆく。

湯船に浸かるこの一人の男は何も考える事無く何も感じる事無く、生ぬるい自分の世界だけに安住していた。

他人と生きている様で他人と生きていない人間になっていた。

でも自分の世界は極めて安定している。

他人から自分の世界に少しでも変化が与えられようならば、常識を持ち出して心の中で相手を批難した。

大人になるほど、この世界には常識知らずなわがままな人間が沢山居ると自分の目には映るようになっていた。

しかし、そんな私は少しも輝いていなかった。

——自分に都合の悪い事は全て悪か？特に苦もなく、しかし特に楽もなく生きてきたのは何故だ？私はいつから大人になったのだろうか？いつから見せ掛けだけの大人になったのだろうか？

わがままなのは私だった。

本当は薄々気付いていた。

私は私に嘘をついて生きてきていた。

蘭子の小さなわがままをこれからは一つずつ許せるような父親になりたい。

そして妻よ、いつも私を陰ながら支えてくれていてくれてありがとう。

私は自分一人で生きていると思っていた。

私が家族を支え、養っていると思っていた。

しかしそれは私の思い違いであり、それはつまり傲慢であった。

明日から私は新しい私に生まれ変わりながら生きてゆきたい。

妻と子に謝る前に、まずはそのように生きてゆきたい。

あの子犬の様にもう一度この世界に生れなおしたい気持ちで私は風呂場から出て、自分の顔を洗面台にある鏡で見た。

自分の顔が年齢の割りに妙に幼く見えた気がした。

(後書き)

登場人物は私の知っている人をリメイクして造りあげたものです.

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6706e/>

小さなわがまま

2010年10月12日04時10分発行